

## 『古事記』上巻における「言うこと」の意味（中）

—— 文芸性を解く手がかりとして ——

岡 田 喜 久 男

前稿（『日本文学研究』第三十二号）で、『古事記』（以下『記』と略記する）上巻に見られる発話部分を丁寧<sup>ていねい</sup>に挙げ、その「言うこと」の意味を考えようとしたわけであるが、上巻における発話部分の量的多さと、重要性を指摘し、特徴を以下の四つにまとめた。

- (イ) 発話形式は「命令」と深く結びついている。
- (ロ) 話の筋が対話によって運ばれる。
- (ハ) 独白が重要な意味をもっている。
- (ニ) 言語に関する特殊な観念が見出される。

右のような特徴が見出されるのは、口誦伝承の文字化について最初の自覚的な人であった太安万侶の功績に負う所が大きい。その端的な証拠が、『記』序文の後半に述べられている、今日の凡例に類する次の部分である。

上古の時 言意並びに朴にして、文を敷き句を構ふる事、字に於きて即ち難し。已に訓に因りて述べたるは詞心に逮ばず、全く音を以ちて連ねたるは、事の趣更に長し。是を以ちて今、或は一句の中に、音訓を交へ用ゐ、或は一句の内に、全く訓を以ちて録しぬ。即ち、辞理の見えがたきは、注を以ちて明らかにし、意

況の解り易きは更に注せず。また姓に於きて日下を玖沙訶と謂ひ、名に於きて帶の字を多羅斯と謂ふ。此くの如き類は、本まに改めず。

日本最古の書物を著わすに当つての、この周到な配慮は、太安万侶が卓越した学識者であったことを証明すると同時に、音訓を識別し、交用の文章を作成し、注を付け、慣用的な用字を使用することを宣言するほどに文字化への確固たる自信に驚かざるを得ない。現存する推古遺文他の資料の、量的また質的に貧弱な状況から考えても、『記』の成立は驚異的な完成度の高さであり、内容の豊富さである。付け加えれば、『記』本文では、中国の四声の上と去を使って、日本語のアクセントを「豊雲上野神」「宇比地邇上神」「妹須比智邇上神」のように表記してさえている。

稗田阿礼の誦習するところの、天武天皇が勅命で記憶させた、(勿論何等かの資料を含めて) 帝皇日継や先代旧辞を、太安万侶が無条件に記録したと言うつもりは無いが、これ程の用意で文字化された『記』は文字遣い・構文・語彙・文法等を詳細に検討される価値を認めてよいと思う。

本稿では、先に挙げた(イ)(ロ)の二項について『記』の文芸性との関係において考えてみたい。

言うまでもなく『記』上巻は、天地開闢から鵜草草葺不合命までの、神々の巻である。「神とは何か」の問題は難しい、流石の本居宣長も『古事記伝』三之巻で

神名・は迦微能美那波と訓べきことも首巻に云り。迦微と申す名義は未思得ず。(旧く説ること々も皆あたらす)……凡て人の智は限ありて、まことの理は、えしらぬものなれば、かにかくに神のうへは、みだりに測り論ふべきものにあらず。まして善きも悪きも、いと尊くすぐれたる神たちの御うへに至りては、いとよく妙の靈く奇しくなむ坐せば、さらに人の小き智以て、其の理などちへのひとへも、測り知らるべきわざに非ず

と述べている。一代の碩学にしてかく言わせる「神」についてこれ以上深く立ち入ることは避けるが、人々が神に求めたものは必竟神の加護による人間の幸福であった。これは、祭についての『古事記祝詞』(日本古典文学大系)の解説に盡きると思う。

祭は、古人の信仰生活のあらわれとして、重要な意義をもつ。それは神を相手としてなされ、これに奉仕することによって人生をよいものとしようとする思想をもっている。その方法としては、物を作り飾り、または供えること、および身体のはたらきによること、の二方面がある。

神に奉仕することにより、人生をよりよきものにして戴く、というのはいいつの時代、どこの国でも考えられたことであり、いままも続

く思想であるが、神からの思賜は、目に見えるもの、見えないものの両方に渡って賜らされた。豊作・豊漁・温和な気候・争いのない平和な日々、等々、人間の願いは限りないが、その全てに神が関っておられると考えた。そしてその神の意志は、最も端的には「神の声」として示されたが、それこそ絶対の命令であった。

神や人を尊んで言うときに、「ミコト」(命・尊)を名の下に付けるが、この語源については、「ミは接頭語・コトは事で、もとは何某ノコトといつてその人をさすいい方であろう。」(時代別 国語大辞典 上代編)と言われているが、同辞典に、「こと」「言・辞」の「考」の部分で

言コトと事コトとは、語源的に一つのものであろう。言コトに出して表現することによって、事柄の実現を信じた上代人の心裡には、言コトは事としてとらえられていたと考えられるからである。複合語の内部にあるコトや、長い連体修飾を受けたコトには、言と事との区別が明瞭でないものが多い。

とされるし、「事」という形式名詞より、コトバを表す「言」の方が語としては古いのではなからうか。いずれにせよ、神や尊貴な人が「言」と密接な関係があることは言えると思う。

神が命令する存在であったことは、

(1) 命ミコト以ちて……と詔りて

(2) 詔りたまひしく……と事依さしき

などの、定型的な表現を始めとして、様々な命令が見出されることから分る。

『記』で最初の命令は、神世七代の直後の、

是に天つ神諸の命以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、「是の多陀用弊流国を修め固め成せ。」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。

で、岐美二神に国土の完成を命じるところである。これと同じ場面を『紀』本文で見ると、二神が「共に計ひて曰はく」となっていて、天つ神の命令とはなっていない。『記』とよく似た第一の一書でさえも「天神、伊弉諾尊、伊弉冉尊に謂り曰はく……」と控えめな表現になっている。

この場面のすぐ後に、女神が先に物を言ったので良くない、という結婚の時の発言順序を問題にした有名な話が続くのであるが、ここでも『記』では、その結婚の不幸な結果について「天つ神の命を請ひき」とあり、

ここに天つ神の命以ちて、布斗麻邇爾上下相ひて詔りたまひしく、「女先に言へるに因りて良からず。亦還り降りて改め言へ」とのりたまひき。

と天つ神の命令が下っている。ところが『紀』本文では全て二神が相談し判断を下している。先に挙げた『紀』第一の一書でも天つ神は、「教へて曰はく」となっていて、『記』の天つ神の權威に満ちているのと全く異っている。

右の二点については、記紀の立場の違いと考えることが出来る。即ち、あくまでも、天つ神↓伊邪那岐命・伊邪那美命↓天照大御神↓邇邇芸命↓神武天皇の万世一系の主張に忠実な『記』は、「天つ神」の命により国土の修理固成・大八島国の生成が為されなければならなかった。一方、神話の内的必然性・資料の意味の尊重に重点を置

く『紀』は、主人公の意志を尊重した形を取ったのではなからうか。伊邪那岐命の「汝命は、海原を治らせ」との「事依さし」（任命）を拒否して激しく泣き続けた須佐之命は、その理由を問われて、「亡き母の国」に行きたいと言って、伊邪那岐を「大く忿怒」らせ、追放されてしまう。「然らば汝は此の国に住むべからず」も神の絶対的な命令であった。

この命令の発せられ方を見ると、『記』では、伊邪那岐命の命に従わないことに対する怒りが中心を為している。それに対して『紀』の方は、

其の父母の二神・素戔嗚尊に勅したまはく、「汝、甚だ無道し。以て宇宙に君臨たるべからず。固に当に遠く根国に適ね」とのたまひて、遂に逐ひき。

と論理的に、その資質の無さを指摘して追放している。

天の岩屋戸から引き出された天照大御神に向つて、布刀玉命は「此れより内にな還り入りそ。」と命じている。この他、神々の話の中には、命令形式の発話が色々あるが、逆に、長い物語であるのに明瞭な命令が最後にしか見られないのが、大國主神の根国訪問の話である。これについては、簡単にその理由を指摘できないが、話の筋がかなり複雑で、会話の部分が極めて少ないからとしか私には言えない。

神が自分を祭ることを要求するのも一種の命令で、独りで国作りが出来ないことを嘆く大國主に向つて「海を光して」来た神が次の様に命じた。

其の神の言りたまひしく、「能く我が前を治めば、吾能く共与

に相作り成さむ。若し然らずば国成り難けむ。」とのりたまひき。爾に大國主神曰ししく、「然らば治め奉るは奈何にぞ。」とまを  
したまへば、「吾をば倭の青垣の東の山の上に伊都岐奉れ。」と答  
へ言りたまひき。此は御諸山の上に坐す神なり。

この話はまた、「祭」の本義に触れた時に述べたことを証明して  
いる。

天皇が天照大御神から続くことの最初の明言が、最も重い命令で  
あつた。

天照大御神の命以ちて「豊葦原之千秋長五百秋之水穗國は、我  
が御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知らす國ぞ。」と言因さし  
賜ひて、天降したまひき。

「命以ちて」、「言因さし」の形式の命令であるが、この場面を『紀』  
で見ると、

天照大神の子正哉吾勝勝速日天忍耳尊、高皇產靈尊の女  
梓幡千千姫を娶きたまひて、天津彦彦火瓊瓊杵尊を生れます。  
故皇祖高皇產靈尊、特に憐愛を鍾めて、崇て養したまふ。遂に  
皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊を立てて、葦原中国の主とせむと欲す。

とあつて、明白な宣言でも、まして命令でもない。これは「記」が  
命令形のパターンを多用する傾向にあることの一つの証拠で、それ  
は、単純化されている口頭伝承の面影を伝えているのではないかと  
思われる。『記』では更にこの後、

高御產巢日神、天照大御神の命以ちて、天安河の河原に、八  
百万の神を神集へに集へて、思金神に思はしめて詔りたまひし  
く、「此の葦原中国は、我が御子の知らす國と言依さし賜へりし

國なり。故、此の國に道速振る荒振る國つ神等の多在りと以為ほ  
す。是れ何れの神を使はしか言趣けむ。」とのりたまひき。爾  
に思金神及八百万の神、譏り白ししく、「天菩比神、是れ遣はず  
べし。」とまをしき。故、天菩比神を遣はしつれば、乃ち大國主  
神に媚び付きて、三年に至るまで復奏さざりき。

とあるが、ここで「命以ちて」「言依さし」の慣用的表現の他に、「言  
趣け」と「復奏」の重要な語彙が見出される。「言趣け」は、  
ことむく(言向・平)(動下)征服する。服従させる。言をもつ

て背いている者を従わせる意という。(時代別 國語大辞典 上代  
編)

と説かれているように、言語の威力を最大限に期待した語である。  
これについては既に考えたことがあるので再述しないが、「ことば」  
が「命令」「支配」と緊密な関係にあることの証しであるは言うま  
でもない。

命令はそのまままで終ることなく、必ず復命即ち報告させられた。  
恐らく命令者は、報告によつて自らの権力支配が正しく望み通りに  
行われたことを確認するわけで、それこそが「復奏」であつた。「記」  
全体で十三例が見出されるが、当然のことながら国家の存続に関わ  
るような、例えば反逆物語、征討物語などの中で使われている。

上巻における「復奏」の六例中五例は、天孫降臨に際し、葦原中  
國を平定に遣された、天菩比神と天若日子が、大國主に「媚び付き  
て」復命しなかつた場面に使われている。「復奏」が無いことを中  
心に話が進められている。

他の一例は、火遠理命(山幸彦)が、海神に命じられた和邇魚に

送られて地上に帰る箇所である。

即ち悉に和邇魚どもを召び集めて、問ひて曰ひしく、「今、天津日高の御子、虚空津日高、上つ国に出幸でまさむと為たまふ。誰は幾日に送り奉りて、覆奏すぞ。」といひき。故、各己が身の尋長の随に、日を限りて白す中に、「尋和邇白ししく、「僕は一日に送りて、即ち還り来む。」とまをしき。故ここに其一尋和邇に、「然らば汝送り奉れ。若し海中を渡る時、な惶畏ませまつりぞ。」と告りて、即ち其の和邇の頰に載せて送り出しき。

右は、命令の達成されたことの確認に「覆奏」が求められている。『紀』では、この部分と同じ内容は第三の一書にあるが、復命は求められていない。

以上、発話部分の中で「命令」と深く結びついているところを検討したわけであるが、『記』の上巻においては、「命令」は本質的に存在し、『紀』と比較してもその価値が高いと断じてよいと思う。そして、『記』が文学性を論じられる時の、口頭伝誦を多量に保持し、素朴で力強い、などと評されること決して無縁では無からう。そして更には、言語の本来的役割が、「命令」に結び付くと思われるが、今はそれには踏み込まない。

次に(ロ)の、上巻の神話が対話によって進んで行く実態について考えてみたい。

神々の中で、最初に具体的な行動が描かれているのは伊邪那岐・伊邪那美の二神であるが、有名な男女の体の違いを述べ合つて結婚するところ

『古事記』上巻における「言うこと」の意味(中)

—— 文芸性を解く手がかりとして ——

是に其の妹伊邪那美命に問いたまはく、「汝が身は如何か成れる。」ととたまへば、「吾が身は、成り成りて成り合はざる處一處あり。」と答白へたまひき。

に始まつて、二神は常に対話が続けて破局に至るのである。

- (1) 問曰ひたまはく…答白へたまひき。
- (2) 先に…と言ひ、後に…と言ひき。
- (3) 二柱の譲りて云ひけらく…
- (4) 語らひ語りたまはく…答へ白ししく
- (5) 言ひしく…語りたまひしく

と、調べれば調べるほど、二神の対話は微妙に書き別けられていることが分り驚かされるのである。中でも、火之迦具土神を生んだ為に黄泉国へ去つた伊邪那美命を取り戻すため、伊邪那岐は黄泉国に往く。

伊邪那岐命、語らひ語りたまひしく「愛しき我が那邇妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟へず。故、還るべし。」とのりたまひき。ここに伊邪那美命答へ白ししく、「悔しきかも、速く来ずて。吾は黄泉戸喫為つ。然れども愛しき我が那勢の命、入り来させる事恐し。故、還らむと欲ふを、且く黄泉神と相論はむ。我をな視たまひそ。」とまをしき。

「黄泉戸喫」(黄泉の国の食事、これをした者は、黄泉国の者になる)をした伊邪那美命は即答を避け、黄泉神と論じ合うので、自分を見るな(見るな禁忌)と夫伊邪那岐命に頼んで殿の内に入るといふ右の本文に続いて、待ち切れなくなった伊邪那岐命は、火を燭して見てしまい、あまりの醜悪さに逃げ還る、と話は進む。勿論怒つた

伊邪那美は、追いかけて、黄泉比良坂で対決し絶縁するのであるが、右に挙げた本文に含まれる会話の抒情性ともいへべきもの、最後の対決の時ののしり合いの言葉

伊邪那美言ひしく、「愛しき我が那勢の命、如此為ば、汝の国の人草、一日に千頭紋り殺さむ。」といひき、ここに伊邪那岐命詔りたまひしく、「愛しき我が那邇妹の命、汝然為ば、吾一日に千五百の産屋立てむ。」とのりたまひき。

は愛憎の極みである。対話は右に述べたように、話を生き生きとしかも感動的にしていると云えよう。

速須佐之男命は、上巻の中でも特異な存在で、まさしく暴風のように荒れ狂うかと思えば、出雲の国では八俣の遠呂智を退治して童女櫛名田比売を救う善良な神でもあった。須佐之男命は、伊邪那岐に尋ねられ、亡き母（伊邪那美命）に逢いに行きたいと答え怒りを買ったが、

伊邪那岐大御神、速須佐之男命に詔りたまひしく、「何由かも汝は事依させし国を治らずて、哭き伊佐知流。」とのたまひき。

ここに答へ白ししく、「僕は妣の国根の堅州国に罷らむと欲ふ。故、哭くなり。」とまをしき。ここに伊邪那岐大御神、大く怒りて詔りたまひしく、「然らば汝は此の国に住むべからず。」とのりたまひて、乃ち神夜良比爾夜良比賜ひき。

のように書かれていて、問答に始まっている。この箇所を『紀』の本文でみると（伊邪那美命は生きている）、単純に素戔嗚尊の非道を責めていて問にも答えも無い。この後須佐之男命は、姉である天照大御神に別れを言うために逢いに行くが、須佐之男命を恐れた天照

大御神は武装して待ち迎える。

伊都の男建踏み建びて待ち問ひたまひしく、「何故上り来つる。」ととひたまひき。ここに速須佐之男命、答へ白ししく、「僕は邪き心無し。唯大御神の命以ちて、僕が哭き伊佐知流事を問ひ賜へり。故、白しつらく、「僕は妣の国に往かむと欲ひて哭くなり。」とまをしつ。ここに大御神詔りたまひしく、「汝は此の国に在るべからず。」とのりたまひて、神夜良比夜良比賜へり。故、罷り往かむ状を請さむとおもひてこそ参上りつれ。異心無し。」とまをしき。ここに天照大御神詔りたまひしく、「然らば汝の心の清く明きはいかにして知らむ。」とのりたまひき。是に速須佐之男命答へ白ししく、「各宇氣比て子生まむ。」とまをしき。少し長く引用したが、注目すべきは、問答が連続することと、過去の会話を含めて話すところである。

二神が問答で丁々発止の遣り取りをするところは小気味良い程で、会話によるスピード感に溢れている、巧妙ですらある。

また、既に伊邪那岐命と交した会話を、天照大御神への答えの中に挿入する話法は初めて登場したものである。このような話法は、現在もよく使われるが、『竹取物語』の中などでは、破綻している例（そうとう補わなければ理解が困難という意味）もあるのに、『記』における完成度は注目に値すると思う。

問いと答えが長々と繰り返されるのが、須佐之男命の、八俣の大蛇退治譚である。

河上から流れてくる箸で、人が住んでいることを察知した須佐之男命は、老夫婦が童女（櫛名田比売）を中に置いて泣いているのを

見つける。

ここに「汝等は誰ぞ。」と問ひ賜ひき。故其の老夫答へ言ししく、「僕は国つ神、大山津見神の子ぞ。僕が名は足名椎と謂ひ、妻の名は手名椎と謂ひ、女の名は楠名田比売と謂ふ。」とまをしき。亦「汝が哭く由は何ぞ」と問ひたまへば、答へ白言ししく、「我が女は、本より八稚女在りしを是の高志の八俣の遠呂智、年毎に来て喫へり。今が来べき時なり。故泣く。」とまをしき。と、老夫と須佐之男命が、殆んど地の文無しに対話を続け、物語が進行しているのである。この後、酒に酔わせて遠呂智を殺そうとするまでが、右のように話し言葉で表現されていて、読む者に臨場感を与えている。

このように会話で話が進行する形は、中巻では、「景行記」の「倭建命の物語」が最も長大であるが、後半の倭建命が亡くなる辺から、歌謡が九首も連ねられていて、歌謡物語へと質的变化を遂げている。然も、その歌謡の後に、「是の四歌は、皆其の御葬に歌ひき。故今に至るまで其の歌は、天皇の大御葬に歌ふなり」とあつて、歌謡の実在によつて物語が実際あつたことを証拠立てているのである。

同じように、会話表現の存在も、物語の実証に役買っているように思えるのであるがいかかであろうか。

ともかく、会話は人間関係の基本にあるもので、読者の地位・立場・感情などが反映することは、今も昔も変わらないところである。

会話が最も効果的に、しかも多様に用いられているのは、大國主神（大穴牟遲神）をめぐる話である。特に「稲羽の素戔」の部分では、大國主と裸の兔の対話が注目される。

この話は、

故、此の國の大國主神の兄弟、八十神坐しき。然れども皆國は大國主神に遊りき。

と唐突に結論を示して始まる、古代物語の典型である。八十神の悪意に満ちた（？）教えに従つて更に苦しんでいる兔に向つて、

最後に来りし大穴牟遲神、其の菟を見て、「何由も汝は泣き伏せる。」と言ひしに、菟答へ言ししく、「僕淤岐の島に在りて、此の地に度らむとすれども、度らむ因無かりき。故海の和邇を欺きて言ひしく、「吾と汝と競べて、族の多き少きを計へてむ。故、汝は其の族の在りの隨に、悉に率て来て、此の島より氣多の前まで、皆列み伏し度れ。ここに吾其の上を踏みつつ読み度らむ。是に吾が族と孰れか多きを知らむ。」といひき。如此言ひしかば、欺かえて列み伏せりし時、吾其の上を踏みて、読み度り来て、今地に下りむとせし時、吾云ひしく、「汝は我に欺かえつ。」と言ひ竟はる即ち、最端に伏せりし和邇、我を捕へて悉に我が衣服を剥ぎき。此れに困りて泣き患ひしかば、先に行きし八十神の命以ちて、「海塩を浴み、風に當りて伏せれ。」と誨へ告りき。故、教の如く為しかば、我が身悉に傷はえつ。」とまをしき。是に大穴牟遲神、其の菟に教へ告りたまひしく、「今急かに此の水門に往き、水を以ちて汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲黄を取りて、敷き散して、其の上に輒轉べば、汝が身は本の膚の如く、必ず差えむ。」とのたまひき。故、教の如く為しに、其の身本の如くになりき。此れ稲羽の素戔なり。今に菟神と謂ふ。故、其の菟、大穴牟遲神に白ししく、「此の八十神は、必ず八上

比売を得じ、帛ふくろを負へども、汝命獲たまはむ。」とまをしき。  
右が「稲羽素菟」の全文であるが、会話によつて複雑な筋が語られてゐる点、二重括弧の部分に見られるような、他者や自己の過去の言葉挿入する話法、「最端に伏せりし和邇」のような細かな描写、「衣服」という偽人間的表現、そして、兎の最後に告げた予言、と様々な特徴に彩られてゐるのである。今日の表現技術からすればそれ程難しいとは思えないかも知れないが、『記』は最初にそれを完成している点で卓越していると思う。

その背後には勿論、口誦伝承が人々の生活に広く深く関与していた古代生活があつたわけで、歌謡にしても唱和が存し、短歌にしても、文字通り「和歌」が主流であつた。神話というと、いかにも神々に関する尊厳な物語のように聞こえるが、語り伝えられてゐる内容、それは「旧辞」と呼ばれてゐたと思われるが、極めて能動的、喜怒哀楽を露わにする世界であつたから、その行動は発話部分によつてよく描かれ得たのであつた。

問答が、必ずしも対面してゐなくても成立している例が、大國主神の「国作り物語」の最後の所である。少名毘古那神と二人で国作りをしてゐた大國主であつたが、少名毘古那神が「當世国」に行つてしまつて途方にくれてしまふ。

是に大國主神、愁ひて告りたまひしく、「吾独して何にか能く此国を得作らむ。孰れの神と吾と、能く此の国を相作らむや。」とのりたまひき。是の時に海を光して依り来る神ありき。其の神の言りたまひしく、「能く我が前を治めば、吾能く共与に相作り成さむ。若し然らずば国成り難けむ。」とのりたまひき。ここ

に大國主神曰ししく、「然らば治め奉る状は奈何にぞ。」とまをしきたまへば、「吾をば倭の青垣の東の山の上に齋き奉れ。」と答へ言りたまひき。此は御諸山の上に坐す神なり。

神々の話であるから、聞えた聞えないの観点で物を言うつもりはないが、二神の關係が会話によつて巧みに語られてゐることは言えよう。

大國主神の二人の子供・事代主神と建御名方神が建御雷神に服従を誓う神話も、会話が挿入されることで生き生きと語られてゐる。

中でも面白いのは、建御雷神と大國主神が話してゐるのを、かく白す間に、其の建御名方神、千引の石を手末たなすまに撃つて来て、「誰ぞ我が国に来て、忍び忍びにかく物言う。然らば力競べ為む。故、我先に其の御手を取らむ。」と言ひき。

と批判するところである。つまり「こそこそ物を言う」とはけしからん、というのであるが、堂々と話しをするので良くて、蔭でこっそり相談することを悪い、とする態度は、道徳的な観点ではなく、尊貴な者は堂々と振舞うとする古代人の思想である。

邇邇芸能命と木花之佐久夜毘売の結婚は、まさしく妻問いの呼びかけで始まつてゐる。尊貴な者の求婚説話と歌謡は、古代文学では、「神武記」「雄略記」「万葉集」などに数多く登場するが、ここでの会話はど率直かつ原型を保つものはない。

是に天津日高日子番能邇邇芸能命、笠沙の御前に、麗しき美人に遇ひたまひき。ここに、「誰が女ぞ。」と問ひたまへば、答へ白ししく、「大津見神の女、名は神阿多都比売、亦の名は木花之佐久夜毘売と謂ふ。」とまをしき。又「汝の兄弟有りや。」と問



ひたまへば、「我が姉、石長比売在り。」と答へ白しき。ここに詔りたまひしく、「吾汝に目合せむと欲ふは奈何に。」とのりたまへば、「僕は得白さじ。僕が父大山津見神ぞ白さむ。」と答へ白しき。

二人の出逢い、求婚は父に許しを請うまでに發展するが、副へて奉り出された石長比売が醜さの為に返され、木花之佐久夜毘売も一度の交りで妊娠したことを疑われる。この間の話も会話で緊張の中に進んで行き、最後は、

吾が妊みし子、若し国つ神の子ならば、産むこと幸からじ。若し天つ神の御子ならば幸からむ。」とまをして、即ち戸無き八尋殿を作りて、其の殿の内に入り、土を以ちて塗り塞ぎて、産む時に方りて、火を其の殿に著けて産みまき。

と進み、火中で無事に三人の御子が誕生することになる。この話も『紀』本文では殆んど同じ内容ながら、会話と言えるものはなく、話の筋が簡単に運ばれている。

『記』上巻最後の神々の物語「海幸彦と山幸彦」は、中巻の「神武記」へ繋がる長大なものであるが、ここでも会話が重要な役を果している。この物語は数多くの要素、

- 一、兄弟が争い、弟が勝利を得る。
- 一、海と山が対照している。
- 一、葦原中つ国と海底の海神の世界が出ている。
- 一、異郷を訪問し、三年を過す。
- 一、異郷の女性と結婚し、子供を生ず。
- 一、「見るな」の禁を犯し、結婚が破れる。

『古事記』上巻における「言うこと」の意味(中)

——文芸性を解く手がかりとして——

一、姉の後に妹が結婚し、子供を育てる。

などを持ちつつ、首尾一貫したところが、今日も語られている理由であるが、その中でも、会話の部分が極めて有効かつ多量にまれている点は強く指摘しなければならないと思う。

話の発端は、弟の山幸彦が、兄の海幸彦に三度までも「各佐知(獵具のこと)相易へて用ゐむ。」と要求したことであるが、『紀』では始め兄弟二人、相謂ひて曰はく、「試に易幸せむ」とのたまひて、遂に相易ふ。

となつていて、弟が無理に道具を交換したことはなっていない。これでは釣針を失した弟が悩む話としては成立しないし面白味が半減してしまうのである。

海辺で悩む弟の前に塩権神が現われ、事情を聞き、海神の宮への訪問を助けてくれるのであるが、ここでも両者は、会話によつて意志を通わして、中でも弟は泣いている理由を話す際に、兄の言葉を用いて複雑な構文になっている。ところが『紀』では「答ふるに本末を以てす。」と簡単にまとめて再述していない。これは明らかに、書物の、前の方に書いたことを再び書かず省略する手法であつて、『記』の態度とは明かに違つている。

海神の宮に至つた弟が、海神の娘豊玉毘売と結婚し、三年目に「大きな一歎(なげき)をするまでも、会話によつて筋が運ばれるが、ここに引用するのが煩しいほどに多量かつ巧妙である。その殆んどは先に挙げた例と用法と同じであるが、海神が弟に兄の鉤を渡し、その渡す時の呪詛の文句を教えるが、そこでは、これから言うべき言葉を、自分の発言の中に含めている点が初出である。

其の綿津見大神誨へ曰ひしく、「此の鉤を其の兄に給はむ時に、  
言りたまはむ状は、『此の鉤は、澎煩鉤、須須鉤、貧鉤、宇流鉤。』  
と云ひて、後手に賜へ。…」

地上に、弟を追つて来た豊玉毘売は妊娠していて、「見るな」の  
禁を告げて産屋に入る。然し「是に其の言を奇しと思はし」た夫は  
「竊伺み」して破局を迎える。このあたりも二人の言葉によつて筋  
が運ばれていて、しかも二人の愛情が込められている。

ただ、最後の局面、地上に残した子供の養育を妹に託するところ  
では、言葉を送るのではなく、歌の贈答で心を通わせている。歌が  
本来心の通じ合いなのであるし、歌い、歌い返すものであるし、返  
歌を「答歌曰」と表現していることから「話しことば」と同様の  
働きをしているのは頷けよう。

以上、話の筋が会話によつて運ばれる実態を見たのであるが、ス  
トーリー、抒情、場面の説明など多様な役割が果されていることが  
明かになった。

文芸性を解く手がかりとして、会話の場面、とくに今回は、(イ)発  
話形式と命令、(ロ)話が対話に拠っているの二点を考えてみた、次  
稿では「独白」「言語に関する特殊な観念」について検討し、合せて  
『記』上巻の文芸性を考えてみたい。